

大業
大學

古典叢刊

13

死靈解脫物語圖書

死靈解脫物語圖書

刊行書目（太字既刊）

伊勢物語 実隆筆天福本

名女情比

大山祇神社

法楽連歌 上

大山祇神社

法楽連歌 下

金葉和歌集

上 伝為家筆本

金葉和歌集

下 伝為家筆本

光源氏歌抄出

伝猪苗代兼載筆本

かなめいし

つれづれぐさ 上

つれづれぐさ 下

古今和歌集

伝阿仏尼筆本

伊勢物語

伝良経筆本

死靈解脱物語

たかね・花橘 坂上羨鳥編

死靈解脱物語聞書

昭和四十八年一月一日発行

編 者 柳 田 征 司

發行者 大愛媛大学古典叢刊刊行会

印刷所 株式会社 関 洋 紙 店 印 刷 所

松山市漢町七丁目七番地一

790 松山市文京町三

愛媛大学法文学部国語国文学研究室内

発行所 大愛媛大学古典叢刊刊行会

振替・徳島一五三九三

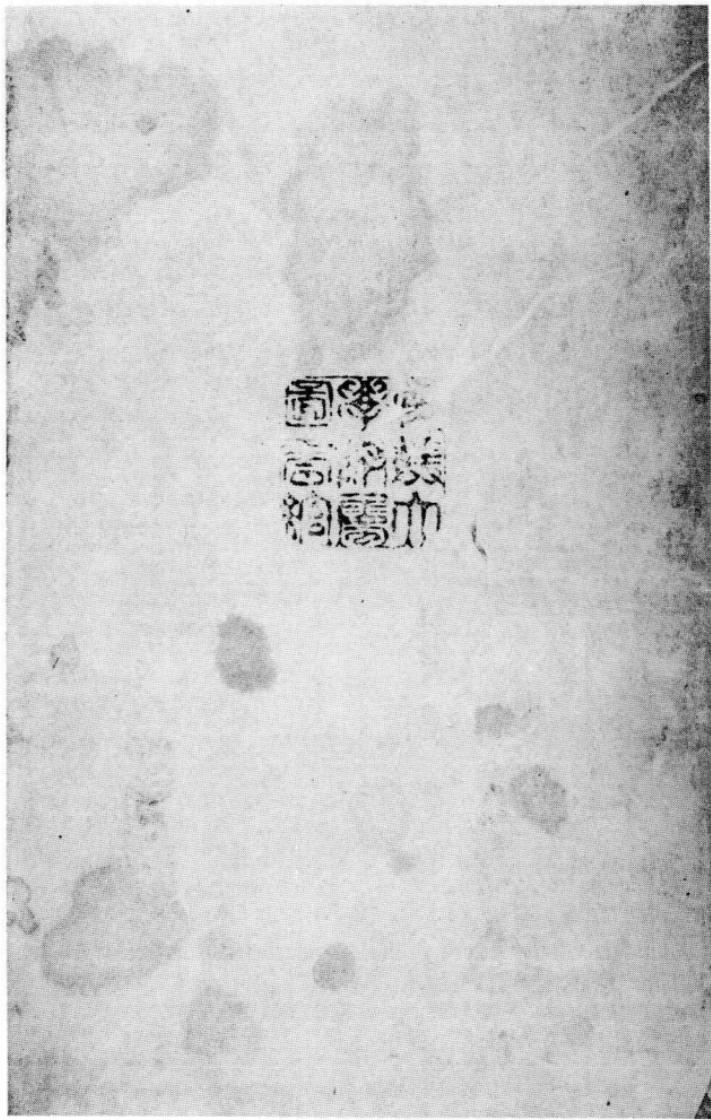
目 次

元禄三年版 本文影印	一
正徳二年版挿画	一四一
影印本文について	一五三
解 説	一五七
要 語 索 引	一八七



上表紙

- 1 -



上見返

死靈解脫物語圖書上

累が寂後之事

此の寛文十二年九月不本國畠田郡新村靈
氣を蒙つてゐる。源氏の事。あゝ娘はがさひ
り専院母れ免夷うらうと御果ればと云ふ。天帝
の人にあらそ方底無事等うな事ゆりし。
それ由來はくかく御の累もか爲。船
うち御のあき悪事かく利むどもす
海に在り也。あへん御のづりと川
少く船おかる。若勢のまく算を當り候が家
へ歸して後事。衰れ水が織ぐのゆせりと。

和の事多し。いはゆる年と一筆付て見
う。薄あとのと月明のありてくにあらわへを
よびてかひだらか奉られ國事と辨ゆるがの際
あくねじ候とぞばと寄。是れ御ひとん
と御ひとえりとおのの事よりて支拂ふをとみ
に生そざりぬれと云物成るく。なまゆる内く傳め
かげ。被れゆもあくあくせむ事もあく者實
苦迫くうるゆよ。家便を以てゆく財をねぎり
やう。さわが頃もはるか昔。ひとえに之を
おきてもまだ易れど今が。諸川多くも廢れ
被りのれがうちわへとあるゆよ。乞也。

あがらやく。織川をよむとひや。おひじゆく
女城川の事つゝも。男も妹のことをいふ。今ま女も
あらうと。而ては、ほんとあら廻の筋筋が、のびと
ぬき。御成より思ひせらうと。うり。うり。死
骸と川めくわらひ。同村の源左家法亮寺とす
善提院。かくいはさ。お龜と。うり。お葬。一早ぬ
戒名を妙林院。正保四年八月二十日。住。般舟寺
の善提院。かくいはさ。甚尙。同村の源左家法亮寺
累々。寛永の善提院。むろあれ。是と。うり。うり。え
と。うり。かられん。うちの。うる。廣。ひく。まえ。今まえ
ゆ。が。取。ひ。是。算。か。ま。う。の。う。そ。わ。め。の。う。そ。

わからぬ男と云ひしときもありそり

累々怨靈來て薦へ（金井の事）

より彼の邪鬼（よき）がうよを遣つてよもよもて方書
とらひのまへあめ殺し。すらり累々怨鬼（えんき）は
さのされど。近傍（ちかほう）の者せば。彼れが西寄れ因縁
とて御供（みそつ）極度房法（ごくほうぽうふ）あつ事（こと）。後（あと）に也。前の
人を絶（ぜつ）ともゆくと云ひたり。かく人命の如く
女娘一人を棄（き）き。名をとめと云。び娘十三の年
八月廿四日其の夜死（しび）る。死去せり。まことに
う称（たと）。其娘の言を耳（み）ふ令（めい）かと云。揚（あつ）と云。
はまくわらせて。おもてうだのうち本（ほん）にせん

と原志高の事に心が走る。あれは月日より何より
らど物の付く事もあつてゐぬとへきが。
果て其の肩を三回してからうしゆり餘よ氣
なり泡と氣を眼の前滅ぼすわざやで
さや。毛すりかぶ根をうなだて泡をひそめ痛
過ゆてて涙と汗と白筋と汗と涙と冷
き氣と汗と涙と汗と涙と汗と涙と汗と
息を死眼とひらう。考究と考究とみえ
相とひらうと考究と考究と考究と考
りするをとつて。又がまく腰と股を犯乱する。
身のうき紙を薦めんやうに腰をあせ累ぎりた

立身が縮川ゆそくゆく。娘の立身とひじ
とひの責めをうながす。立身やがてどうこうされ
るのをうながす。我らの立身地獄の呵責は盡てほ
うれしゆす。立身あつうるのをいだ。娘も娘の立身
の立身が縮川ゆそくゆく。娘とひの立身とひじ
うす。立身と我立身の立身立身とひじ。立身
が縮川ゆそくゆく。立身とひの立身立身とひじ。立身
の立身が縮川ゆそくゆく。立身と我立身の立身立身とひじ。立身
の立身が縮川ゆそくゆく。立身と我立身の立身立身とひじ。立身

もてよ此とつてす。御丈も度りたまへ
也。さう思ひあらば法華寺へ近づけ。釋
迦の御みをとゆ。さうひきとひくかれ。飛
翔。其財。一も隕。能れあらざ男た。云々。夜。行
詠。一詠。よわゆる集り。飛うち。ひわゆる。詠
詠。いのども。わき。不思議。うきの。うき。ひがひ
あらんと。候。方ばかり。よかが。うたわれ。村
中。れぞれ。先。あらく。と。まつづ。而。よ。集り。み。か。の。法。寺
ま。お。け。れ。その。教。め。れ。あ。ま。い。か。れ。食。喫。喫。の
飛。人。も。乞。ふ。海。うら。と。苦。痛。顛。倒。て。總。入。り
居。也。ま。村。人。あ。づ。と。う。と。れ。が。ま。元。

リ年。酒のとの身となりて、物を多くあつた。
金をうがひかへのまに累もやえたり。御妻の元
かきの成さうへと。情のくじび流川(櫻のそば
でうやせ)。其惡念とくもんの事わら今と方
法施すに添き形うそ。おひく給とうべと。故
みをせんげのと変教へ。若と周囲は理うと
じよく流轉のくよし酒。すけとくわうやう
らうやうの附村人の中へむづきのまうて
ゆく。今れ初の酒。ゆく萬どもようやう
ととめへやえす。ばれ酒。酒の御恩の御恩と
ゆえう。御酒。御恩の御恩とふ酒をして。ふ酒の

わきを車の窓を開けられても、運転手は仍々
ひそんでまつとてひびく。かとおれとの電
線を高め、それから車へ移るが、もろに重いもの
が腰を犯せ、もうねえ、狼狽の仕事にてあるぬ
うとアリマツテアリ。手袋を捨てて、通
く縫通す。汗やくよぐら運転席にあ
れど黒ずほどの初つてはと縫のあゆ
て帰らぬ。肩をうちらうとあくが感覚入
りしき病よあれど、ゆふふと見下らぬ。成程
でわざとお前等と話さんとひぶらう。
後悔する多し。おもむく思はれよ。

りとくよきを教へて方をりて其事からうの間ひを
祐と國よかひのじとあつて。かわらひのや
あらめり。び村々と餘が定ほの事より。されば
人ゑんもあらそらよ。又津村のむだよ。アレトナリ
れ。又今いは。御座せられのと云附村人向とい。
え。されにされんもや。と累づらく。法恩寺村の邊
をうそと。御くびりとまわねりとつてもうと。拂は
ううとまつも。既よ化んを生れて。わざくある
く頃。どうしと食を。うひ。ひ。あ。う。う。り。や
と附村の人。木板ひ。せんと。洋漆。けり。ウ。粉。を。か。木
ひ。う。う。ひ。木。漆。道。小。板。と。教。音。一。ヨ。う。共

羽生村名立年をも思ふ事は村の同音に事
事はあ村の名をも思つ。何年かたまつてある
人の者年をも思ふ事はあくまでもうの